

金属アートを通じて新たなモノづくりに挑戦する 有限会社金属考房ゆう

精密製の板金や溶接を行い、創業 83 年を迎える株式会社桑田金属製作所。2001 年に同社のレーザーカット部門として設立されたのが有限会社金属考房ゆうだ。遊び心あふれるステンレスパイプを加工した金属アートやオブジェを創造している。金属アートを生み出すほどの高い技術力も認められ、航空機用機装板金や部品組立も行っている。さらに鉄道車輛の部品や各種装飾板金をはじめ、プラント関係のタンク類、水処理フィルター、熱交換器など金属各種の加工を幅広く手がける。



長尺角丸パイプ切断可能なレーザー機を導入、アーティストともコラボ

2007 年には 1 本の大口径パイプ 300A (318 パイ)・250 角パイプの長さ 8 m を自由にカットするレーザーマシンをオーダーして導入。2 つのメーカーのよい所を併せつつ世界で一台のレーザーカットマシンという。レーザー技術の進化に合わせて新たな設備投資を行っている。「常に技術の半歩先を進みたいという気持ちがある。父から受け継いだ長い歴史をもつ会社として、業界のリーダーとしても先を進まなければならないという自負がある。」と桑田氏は語る。

また、アーティストとのコラボレーションも実現。切り絵画家の久保修氏の切り絵をもとに繊細な図柄をレーザーマシンで削り上げ、あんどんなどを制作する。紙との違いもあり試行錯誤もある。「レーザーでは一筆書きのようにカットすることでコストや時間削減になる。できるだけ一筆書きでカットできるよう細心の注意を払って図面を作成しパイプに加工を行っている。久保先生の作品の世界観を壊さないよう心がけているので加工は全部任せていただいている。全幅の信頼を寄せていただいているのでありがたい。」こうしてできた作品はニューヨークなど海外の個展でも人気を博している。

金属をつなげる仕事から今後は人と人をつなぐことも目指す

桑田氏は 2007 年に東成工業会の会長や大阪府シートメタル工業会の会長に選任され、業界の発展のために尽力する。

「板金加工業を取り巻く環境は国際化や情報技術の発展等めまぐるしい早さで変化している。製造業の変貌に対応するためにも業界の枠を超えたネットワーク形成が重要になる。今まで以上に情報交換が大切だ。鉄と鉄をつなげる仕事をしてきたが、人と人をつなげられるようにしていきたい。」と語ってくれた。

レーザーカットマシンのアピールにステンレスパイプを使って門松を制作

ステンレスパイプを使った金属アートを始めたきっかけは、1982 年に最新のレーザーカットマシンを導入したことだった。株式会社桑田金属製作所の代表取締役であり、有限会社金属考房ゆうの監査役である桑田泰彦氏は「最新の機械と職人の技術を融合してより良い物を作りたい。」と振り返る。



世界にひとつの長尺角丸パイプ切断可能なレーザー機。8 m もの長さのカットが可能

が数社見学に訪れたほど注目を集めたが、導入したからといってすぐに仕事につながるわけではなかった。そこで、空いている時間に得意先のロゴマークや会社名を入れた立て札を作って配るなど、レーザーカットマシンを扱う技術の PR を始めた。」と振り返る。

もともとはレーザーで切り絵がしたかったという桑田氏。「画家の叔父の影響で子供の頃から絵画が好きで、切り絵や版画に関心があった。硬いステンレスを柔らかく表現できればと思っていた。」

1990 年に 3 機目のレーザーカットマシン導入を検討した時にタンクのノズルや排出口を付けやすくするために、二次元レーザーの Y 軸を回転軸に改造し、三次元レーザーに負けないパイプカットができるように別注依頼。このレーザーカットをアピールするためにステンレスパイプ製の門松を制作した。それを展示会に出品したところ、周囲は驚きと感動に包まれ注目を集めた。

次はステンレスパイプを使って日本的な何かができないかと考え鯉のぼりを作成。テレビ番組に取りあげられ、レーザーのカット技術のアピールが金属アートとして話題になる。そして、毎年開催される展示会になにかひとつ出品し続けた。

2m ものティラノサウルスが受賞、オブジェ制作の依頼が多数入る

1992 年、映画好きの桑田氏がハリウッドで恐竜をテーマとする映画の撮影が行われていると知り、ステンレスパイプの恐竜制作を手がける。長さ 2 m にもなるティラノサウルスとブラキオサウルスを制作した。溶接は一切行わず設計の段階でいかに曲げやすくするかにこだわった。

「レーザーでカットするのは数分だが、筒状から形を作るための構想は約 1 年かかる。パイプの代わりにトイレペーパーの芯に図柄を描いてどのようにカットするかを考える。それをモデルに精密な図面を制作し、実際のパイプの加工を行う。図面で上手くいってもパイプでは難しい部分もあるので微調整をしていく。こういった遊びの中でこそ、技術が磨かれていくと思う。昔の職人はステンレスナットをやすりで削って磨いて指輪を作ったもの。その中でやすりのかけ方を学び、いかにキレイに作るかを身体で学んだ。最新のレーザーカットマシンを使いながら遊ぶことはとても贅沢なことだが、遊びの中での創意工夫が仕事の技術につながっていく。」

このスチールパイプの恐竜は「しのばずフェスティバル」に出品し、読売新聞奨励賞を受賞した。

鯉のぼりや恐竜などがメディアにも取りあげられ、さまざまな依頼が舞い込むようになる。兵庫県岡市の依頼でコウノトリが飛翔する大きなモニュメントを制作した。一般の方からステンレス製の墓の依頼があったことも。ほかにはパチンコ店の沖縄スロットのコイン受けカバーとして創ったシーサーのオブジェ・四国の高速道路が八の字に交差した記念のオブジェ・大阪の道頓堀に飾られたえべっさんの看板などがある。

得意先などから退職者への記念品や周年記念用として十二支のオブジェの依頼も多い。また、テーマパークのアトラクションの飛行機を手がけるなど、幅広いことに驚かされる。

現在、金属アートでは動物園シリーズや昆虫シリーズを制作している。水族館なども手がけたいと考案中だ。



有限会社金属考房ゆう

代表取締役 桑田 あゆみ

〒537-0002
大阪市東成区深江南2丁目2番3号
TEL : 06 (6975) 0797
FAX : 06 (6973) 5455
<http://www.kuwata.co.jp>

【事業概要】

・精密製板金及び製造
・金属加工 ・オブジェ制作 ・レーザーカット及び溶接等

